

二〇二五年度

第一回 入学試験問題

国語（五十分）（全十四ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはつきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。



東京純心女子中学校

一 ―線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 車のユシュツ額が伸びた。
- (2) オサナい弟の世話を^のする。
- (3) 彼女はメイロウな性格だ。^{かのじょ}
- (4) この物質にはコユウの性質がある。
- (5) 理科室でカメラをシイクする。

二 次の……線部が直接かかる言葉を、――線ア～エの中から一つ選び、

記号で答えなさい。

- (1) いつも ア遊んでいる 公園の イ壁^{かべ}に ウ誰^{だれ}かが
エ落書きした。

- (2) その店には ア私の 好きな イ花が ウたくさん エあつた。
- (3) 母の ア美しい イ着物姿は ウ人々を うつとり エさせた。
- (4) ア明日は 友達と イ公園に ウ行く エ予定です。
- (5) ア彼女は^{かのじょ} 静かに イ教室で ウ本を エ読んでいました。

三 次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。

浜野奏太の「じいちゃん」は、食卓にパイナップルやパイナップルを使ったお菓子が登場すると必ず嫌な顔をする。奏太は小学一年生の時から、「じいちゃん」と二人で毎日のようにキャッチボールをしながら、「じいちゃん」が子どもの頃、台湾で暮らしていたことなどを、いろいろと聞いていた。次の文章は、中学生になった奏太が、「じいちゃん」の台湾での話を聞いている場面である。

中学を卒業した俺は、父親のパイナップル工場で働きはじめた。跡継ぎとして「一」経営を任せると言われ続けていたが、仕事は相変わらず、畑のパイナップルの世話と、ベルトコンベアーの前での流れ作業だ。俺の腰が曲がっちゃったのは、きっとパイナップルを植えたり、畑の草取りをしたり、重い籠を担いで実をもいだり、①あの時に一生ぶん腰を使っちゃったからだな。「誰より仕事のことを知り、誰よりも手ぎわが良くなければ、使用人に馬鹿にされる」②親父はいつもそう言っていた。そのくせパイナップルの皮の剥き方も知らなかった。

(中略)

戦争が長引いて、内地じゃパイナップルどころじゃなくなったというのに、工場は続いていた。畑の大半はサトウキビ畑に変えられちゃったが、戦地に送っていたんだ。将校たちが食べるパイナップルの缶詰を。

③不思議だったよ。米がない、肉も魚も卵もない、そのうちに野菜もなくなった。俺たちは乏しい配給だけでろくに飯が食えないのに、食べ物をつくる工場は動き続けていたんだからな。

配給ってなにか？ 百科事典を読め。

配給を調べたが、野球ばかりやっている中学一年生には難しかった。糖尿病のじいちゃんが頼んでる宅配の食事みたいなものだろうか。

とにかく俺が十七、八の頃は、食い物がなかった。よくカエルを捕まえて食っていた。台湾のヒキガエルはでかいんだ。あとはパイナップルだ。うちにはパイナップルだけはたっぷりあったからな。丸ごとのものも、缶詰も。毎日、パイナップルばかり食っていた」

なんて贅沢な。うちでパイナップルを食べるとしたら、スーパーで特売をしていた時ぐらいなのに。

そうか、若い頃に食べすぎたからか。じいちゃんのパイナップル嫌いの秘密がようやくわかった、とその話を聞いたばくは思ったのだが、違っていた。

◎

中学三年生の秋、野球の強豪校に進学を希望している奏太は、それに反対する両親と意見が合わず、対立していた。「じいちゃん」はわかってくれると

信じ、思いをぶちまけに行った。その頃の「じいちゃん」は、野球どころか庭にもめったに出なくなっていた。

「あのな、奏太、好きなことと、うまくいくことは、別なんだ」

「なにそれ」いまさらなに言ってるのや。

「野球の話じゃない」

「なんの話さ」

「人生の話だ」

あの日も俺は、パイナップル畑に出ていた。

昭和二十年の五月だった。台湾じゃパイナップルの収穫時期だ。

そこに突然空襲警報が鳴り響いたんだ。空襲警報のことは前に話したな。

「来る来る」と言うが実際には来ない。いつも騙されるから、④俺たちは縮めて「空襲」って馬鹿にしていた。

なにしろその日も空は青かった。台湾の夏の空の色はそりやあもう、宝石を溶かして塗ったみたいに青いんだ。雲は白く、そして土は赤かった。こんなところで殺し合いなんて起きるわけがない。他の連中は逃げたが、俺はパイナップルをもぎ続けていた。

だが、今度の空襲警報は本物だった。

市街地の方角に煙が上がっているのが見えた。炎も上がった。イナゴの群れかと思うほどの数の爆撃機が飛んでいた。

そのうちの一機がこっちへ向かってきた。

爆撃機じゃなくて、護衛の戦闘機だ。戦闘機は始末に悪い。あいつらは建物を爆撃するんじゃない。機銃で地上にいる人間を狙い撃つんだ。兵隊かどうかなんて関係ない。空からは人間なんて蟻にしか見えなだろうからな。目についたそばから踏み潰すだけだ。

俺はパイナップル畑の中を走った。背の低いパイナップルの葉に体が隠れるように腰をかがめて。工場に戻ったらかえって危ないことはわかっていた。パイナップル畑の先にある森に逃げるつもりだった。

戦闘機は本当に撃ってきた。脱殻機みたいな音が背後に迫ってきた。俺はさらに腰を低くした。草履を履いた足や手や顔をパイナップルのぎざぎざの葉が打ち据えて切り刻んだ。きつと、いつも頭をもうでいる人間への仕返しだろう。パイナップルの熟れた生首が次々に撃たれて、一面に甘酸っぱい匂いが漂った。

⑤それでも空は青かった。

人間を笑ってるみたいに青かった。

森まであと少しの時、気づいたんだ。逃げおくれパイナップルの蔭に隠れているもう一人に。

俺はその体の上に覆いかぶさった。俺より年下に見える女の子だったからだ。助けるのが男ってもんだろ。頭に赤い布を巻いた娘だった。俺は語り話のパイナップルの精ではないかと疑った。だが、違った。驚いてこっちに首を振り向かせたのは、李桃みたいに素晴らしく大きな目をした娘だった。

「それが、ばあちゃん？」

写真の中のばあちゃんの目は、すももというより小豆^{あずき}だけど。

じいちゃんは立ち上がって、仏壇^{ぶつだん}の扉^{とびら}を閉めた。

「違う」

俺たちはずっと抱^だき合っていた。娘は震^{ふる}えていた。体は温^ぬかった。

あんな時なのに、あんな時だったからか、俺は鼻^{はな}がくつきそうなほど近くの子の顔を見つめ続けていた。娘は何か呟^{つぶや}いていたが、最初は何を言っているのかわからなかった。収穫の手伝いに来ていたタイヤル族の娘だったんだ。

戦闘機が去ってから俺たちは磁石^{じしつ}みたいに抱き合っていた。それから□磁石の極がさかさまだったことに気づいたように、一瞬^{いつしゆん}で離れた。

俺は野球部のチームメイトから習ったタイヤル語で「ロカハ・ス^{だいじょうぶか}」と聞いた。後で知ったが、それは「お元気ですか」という意味だった。娘は学校には行っていたようで「だいじょうぶ」と日本語で答えた。

戦闘機がまた戻ってくるかもしれない。俺たちはそのまま森に身を隠すことにした。死にかけてたというのに、俺はその子に夢中で話しかけ続けた。

「好きになつたんだね」

じいちゃんとかんな話をするなんて。ぼくも成長したもんだ。

「まあ、なんていうかな」

じいちゃんは、甘酸っぱいものをほおばっているような顔で口をつぐんでしまった。しばらく経^たつてから、突然^{とつぜん}言った。

「キャッチボールでもするか」

「だいじょうぶなの？」

「まだまだお前には負けない。そうだろ」

ぼくはじいちゃんの□曰^や「痩^やせた体を支えて答えた。」もちろん

緑地公園になった河川敷^{かせんじき}は野球禁止だし、どっちにしろじいちゃんの足では遠くには行けそうもない。キャッチボールは家の前の道でやることにした。十メートルも離れていない場所に分かれて。じいちゃんとぼくが最初にキャッチボールをした時ぐらいの距離^{きょり}だ。

ボールはちゃんと円滑^{えんかつ}に行き来した。この九年でぼくは、じいちゃんのかまえている場所にボールを投げるコントロールを身につけていたし、じいちゃんが投げるとうんでもない荒れ球^あもたいていはキャッチできたからだ。⑥そして途中^{とちゆう}からは、じいちゃんに気づかれないうに少しずつ距離を縮めていった。おかげで昔みたいに会話のできる距離になった。

日本は戦争に負けたが、俺は台湾に残りたかった。その頃にはタイヤル族の娘と俺は、なんちゅうか、まあ、いい仲になっていたから。むこうもそれを望んでいた。

日本と台湾の立場は逆になったが、台湾の人たちは優^{やさ}しかった。治安も悪

くなかったから、しばらくのあいだは国からも引揚げの話は出てこなかったしな。

でも翌年になるとそうもいかなかった。日本人がいつまでも台湾に残っていた情勢じゃなくなってきたんだ。戦争が終わったのに、今度は台湾の中で内輪揉めが始まったんだ。俺一人で娘の暮らす村に隠れ住もうとまで思いつめていた時に、父親が死んだ。

勝手なことは言っていられなくなった。母親は病気がちだったし、二人の弟と三人の妹もいた。

日本に帰る日、俺は引揚げ船が出るまでずっとパインと一緒にいた。パインっていうのは、わかるか、そうだ。俺がつけたその娘のあだ名だ。

出港間ぎわ、どうしても船に乗らなくてはならなくなった時、パインが紙包みを俺に寄こしてきた。「お別れの贈りもの」そう言うて。

「お別れじゃない。必ず迎えに来る」俺は結局嘘になる言葉を口にした。

俺の言葉が嘘になることを俺よりわかっていたはずなのに、パインは笑って頷いた。

船の中で開いた紙包みの中身は、パイナップルでつくった焼き菓子だった。

パイ？ そんなしやれたものじゃない。村で祝い事がある時に食べるという、あの子の手づくりの菓子だ。

俺はそれをずっと肌身離さず持っていた。船が日本に着くまで。身を寄せる親類の家までの道のりでも。パイナップルの匂いがずっと俺を包んでいた。

腐らないうちにと思っても食えなかった。食ってしまったら、あの子の日々も消えてしまう。

じいちゃんはキャッチボールを始めた時から息切れをしていたから、こんなに長く喋ったはずはなく、この話にはぼくの想像がつけ加えられているに違いない。でも、相手の女の子をパインと呼んでいたことも、二人が交わしたせりふの一言一句も、じいちゃんの言葉のままだ。この時のじいちゃんは正直だった。懺悔するみたいに。驚くほどロマンチックだった。

考えてみれば当たり前だ。じいちゃんも生まれつきじいちゃんだったわけじゃないし、ロマンチックに歳は関係ないのだから。

「菓子が石みたいに硬くなって、匂いもしなくなってから、△食った」
あるいは入れ歯の具合のせいかもしれないが、本当に口の中で噛みしめるようにじいちゃんは口をもごもごさせた。

（萩原浩「人生はパイナップル」より。なお、本文には省略等があります）

*1 俺……「じいちゃん」のこと。当時は台湾に住んでいた。

*2 ベルトコンベアー……ベルトの上に品物をのせて運ぶ装置。

*3 内地……国内のこと。

*4 引揚げ……戦後、国外から内地へ戻ること。ここでは、台湾から日本へ戻ること。

*5 懺悔……過去の罪を悔いて、他人に告白すること。

問一 一・ロ・日・ㄣに入る言葉として適切なものを、次のア、

エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ようやく イ ゆくゆくは ウ いきなり エ すっかり

問二 ― 線①「あの時」とは、いつですか。本文中の言葉を使って、解答欄に入るように、二十字程度で答えなさい。

【二十字程度】時。

問三 ― 線②「親父はいつもそう言っていた。そのくせパイナップルの皮の剥き方も知らなかった」とありますが、この言葉に込められた「じいちゃん」の気持ちとして適切なものを、次のア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 親父は、仕事の手際もよく、経営者として優秀だったが、基本的な仕事であるパイナップルの皮の剥き方を知らないので、工場の行く末を案じている。

イ 親父は、使用人に馬鹿にされることをもつとも恐れていたが、基本的な仕事であるパイナップルの皮の剥き方を知らないので、馬鹿にされるかもしれないと心配している。

ウ 親父は、経営者として誰よりも仕事を知るべきだと話していたが、実際は基本的な仕事であるパイナップルの皮の剥き方も知らなかったため、不自信を抱いている。

エ 親父は、跡継ぎとして工場の経営を自分に任せると言っていたが、基本的な仕事であるパイナップルの皮の剥き方も知らないため、あてにならないと思っている。

問四 ― 線③「不思議だったよ」とありますが、なぜ「不思議だ」と感じたのですか。本文中の言葉を使って、三十五字以内で答えなさい。

問五 ― 線④「俺たちは縮めて『空報』って馬鹿にしていた」とありますが、「空報」と言うことがなぜ馬鹿にすることになるのですか。説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、二十字程度で答えなさい。

空襲警報が鳴っても、爆撃機がくることがなかったため、「空報」を「空襲警報」の省略ではなく、【二十字程度】から。

問六 ― 線⑤「それでも空は青かった」という表現を説明したものとして、適切なものを、次のア、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 戦闘機に撃たれたパイナップルがまるで生首のようにつぶれている地上の悲惨な状況とは対照的に、いつもと変わらない晴れやかで、いかにも平和な青空を描くことによって、状況の残酷さを強調している。

イ パイナップル畑に身を隠して戦闘機から逃げなければならぬ自由な現実に対し、いつもと同じように晴れた青空の開放的な様子を描くことによって、心の自由までは奪われていないことを暗に表している。

ウ 戦闘機の爆撃から逃れようと必死に逃げる「俺」の姿を通して、人間がいかに小さい存在かを示しながら、いつも通り晴れている台湾の青空を描くことによって、自然の存在の大きさを示している。

エ パイナップルのぎぎぎぎの葉に傷つけられている人間を、青空が笑っているという比ゆを使うことによって、パイナップル工場で働くことのきびしさと、戦闘機に狙われる恐怖を鮮明に表現している。

問七 ―線⑥「そして途中からはく少しずつ距離を縮めていった」とありますが、このときの奏太の様子として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 野球を始めた小学一年生のころと同じ距離にして、「じいちゃん」に昔を思い出させようとしている。

イ キャッチボールをしながら話をした小学生のときのように、「じいちゃん」と話がしたいと思っている。

ウ 「じいちゃん」がとんでもない荒れ球を投げても、確実に取れるように気をつけている。

エ 「じいちゃん」がうまくキャッチボールができなくなったので、つきあうことを面倒くさがっている。

問八 次の会話は、本文について二人の中学生が話している場面です。

【1】～【6】に入る適切な言葉を、本文中から指定の字数で抜き出し

なさい。

純子 「じいちゃん」がパイナップル嫌いなのは、【1 九字】からではなくて、パイナップルにまつわる切ない思い出があったからなんだね。

心香 そうだね。「戦争」が描かれているけれど、話し言葉で書かれていて、ときどきユーモアのある表現になっていて、読みやすかった。

純子 比喩表現が多いのも特徴だね。たとえば、パイナップル畑で助けた女の子の目を【2 十五字】と表現したり。「じいちゃん」には、その女の子の目が印象的だったっていうのがよくわかるね。

心香 それから、奏太に「好きになったんだね」って言われて、「じいちゃん」が【3 十五字】のような顔になったところも、「じいちゃん」の照れた様子がよくわかるね。

純子 私は、「じいちゃん」が奏太に言った【4 二十字】っていう言葉が、気になった。パイナップル畑で出会った女の子と「いい仲間になっていた」から、台湾に残りたかったけど、帰らなくてはいけなくなってしまうたときのことを言ってるんだなって思った。

心香 そうだね。その女の子をパインってあだ名で呼んでいたんだよね。お別れの日に、【5 七字】って言った「じいちゃん」の言葉は、嘘になるってわかっていたはずなのに、「パインは笑って頷いた」ってあるよね。パインはどうして笑って頷いたんだろう？

純子 パインは、「じいちゃん」を信じてたんじゃないかな。嘘になるとわかつ

ていたはずとあるけれど、「じいちゃん」の視点で書いてあるから、パイ
ンが本当に嘘になるとわかっていたかはわからないよね。

心香 だけど、「お別れの贈りもの」って、パインは言ってるから、やっぱり、
迎えには来ないってわかってたんじゃないかな。わかっていても、そう言
ってくれる「じいちゃん」の気持ちが嬉^{うれ}しかったし、悲しませたくなかつ
たのかもしれないね。信じたい気持ちもあつたかもしれない。

純子 もらったパイナップルの焼き菓子を食べてしまったら、「6 十四字」
気がして、それが硬くなるまですつと食べなかった「じいちゃん」の気持ち、
ちよつとわかる気がするな。

四 次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。

孤独感が命を奪う

大阪府北部で60歳以上の高齢者を対象に実施されたアンケートから、①意外な結果が得られました。家族と同居している人よりも、一人暮らしのほうが男性も女性も生活満足度が高かったのです。②、健康状態が低下しても、体が相当悪くなるまで満足度が維持されたそうです。一人暮らしだと、何かあってもすぐに助けがくるとは限りません。不安に思ったり、さびしくなったりしないのでしょうか？

これに関連して、ヨーロッパ心臓病学会で注目すべき研究報告がありました。体と心の健康に影響を与えるのは一人暮らしかどうかではなく、その人が孤独と感じているかどうかということです。家族と同居していても自分は孤独だと感じている人は、そうでない人とくらべて死亡率が2倍高く、うつ病の発症率も上がっていました。孤独が炎症を悪化させるといふ報告もあるようです。ここに慢性炎症が含まれるかはつきりしませんが、孤独感が体と心を②むしばみ、老化を進行させるおそれがあるということです。

孤独感は無力感とつながりやすく、「前向きな考え方」とは正反対ともいえる感情です。「こんなことをして何になるんだろう」「結局、うまくいかないんだ」「もう、いやになった」……こんなことを考えていたら、健康であることも、長生きしていることも、すべて無意味に思えてくるでしょう。③それだ

けならまだしも、こういう暗い気持ちで病気がかわる遺伝子のスイッチをオンにしないとも限りません。

百寿者の多くが自宅で家族と同じものを食べているという調査結果がありましたね。一緒に食卓を囲み、言葉をかわし、笑い合うことが百寿者に力を与えます。その一方で、一人暮らしであっても、積極的に人とつながったり、仕事や趣味を楽しんだりしている人は孤独を感じにくいとされています。生き方は人それぞれですが、一人暮らしの人は、気の合う友人、知人、趣味の仲間、兄弟姉妹と集まって、④気がねなくおしゃべりしながら、ゆっくり食事を楽しむ機会を持つようにすると、さらに健康でいられると思います。

年齢を忘れて過ごすとは体が若返る？

心の老化と体の老化が固く結びついていることを示した有名な研究があります。アメリカの心理学者エレン・ランガー博士が1979年に実施したもので、⑤時計の針を巻き戻す実験と呼ばれています。具体的にいうと、博士が巻き戻したのは「心の時計」でした。

70代の人々を2つのグループに分けて、それより20年前にあたる1959年のアメリカを忠実に再現した建物のなかで、それぞれ一週間過ごしてもらいました。部屋の装飾や日用品は20年前の製品で、テレビ、ラジオからは20年前のニュースが流れます。このうち一方のグループは、自分は19

59年に生きていると考えると行動し、会話することが求められました。1959年をあらためて体験したことになります。もう一方のグループも同じ建物に滞在しましたが、こちらは実験が行われた1979年に生きる参加者らが過去の思い出にひたるプログラムになっていました。

滞在が終わらないうちから、どちらのグループの参加者にも変化があらわれて、食事の準備、後片付けなどを熱心に手伝うようになりました。自分のことは自分でやろうとする姿勢が出てきたのです。それだけではありません。滞在終了後の検査では、滞在前とくらべて、いずれのグループも聴力と記憶力が上がり、握力が明らかに強くなって、健康的な形で体重が増えていました。そして、20年前をあらためて体験したグループの63パーセント、過去の思い出にひたったグループの44パーセントで知能テストの結果が向上しました。

とくに体験グループは視力まで回復し、関節がやわらなくなり、来たときはステッキを使っていたのに、帰りはステッキがいなくなった人もいたそうです。実験の前後で撮った写真を、この実験について何も知らない協力者に見せたところ、体験グループの全員が若返っているとの回答が得られました。

20年前の自分に戻ったと思ひ込むことで、体と心の若さがよみがえったのでしょうか。信じられないような結果ですが、ランガー博士は、「私たちの限界を決めているのは体ではなく、ものの考え方だ。自分の健康について、頭のなかで限界を決めてしまわないことが大切だ」と述べています。

この実験には不十分な点もあります。目に見えない心の状態をどこまで正確に確認できたかわかりませんし、参加者は全部で16人でした。科学的な研究としては少な過ぎます。そして、もっと大きいのが、その後、同じような実験が行われていないことです。医学研究の世界では、何度実験を繰り返しても同じ結果が出るのが重要です。1回だけでは、勘違いとか偶然だった可能性を否定できないからです。

博士によると、この実験は昔の小道具を集めて「20年前の世界」を作り上げるのに巨額の費用がかかるために、繰り返し行うのが難しいとのことでした。現代ならコンピュータ技術を活用するなどして、違う形で実施できるかもしれません。

健康寿命を延ばす最後のひと押しとは

この実験結果があまりにも印象的だったことから、話を飛躍させて、「気持ちひとつで体が若返る」「病氣も治るんじゃないか」と主張する人もいます。ようです。□博士自身はそんなことは言っていません。

ここまで見てきたように、健康寿命は食生活と運動、喫煙などの生活習慣、受け継いだ遺伝子のタイプ、人種による体質の違い、医療水準や医療制度、健康と医療に関する知識など、多くの要因が重なり合って決まります。博士の研究が明らかにしたのは、そこに、心のありようも加わるということでした。考え方が寿命に与える影響については研究が始まったばかりで

すが、健康寿命を延ばす条件がいくつかそろったところで最後の一押しとなったり、体力が落ちたときに下支えしたりする可能性は十分あります。

診察のとき、「悪いところがあちこち出てきちゃってね。歳も歳だし、しょうがないね」と不満そうに言う人がよくいます。もう人生も下り坂なのだから、これからは悪くなる一方だろう。あきらめるしかないじゃない、という意味でしょう。言葉は悪いのですが、体調不良を歳のせいにして、「だから、何もしない、できない」と言っているように聞こえます。

そんなときは、「体は道具と同じで、しっかり手入れすれば長く使えますよ」と答えることにしています。職人さんにとって道具は何よりも大切なものなので、一日の作業が終わると時間をかけて丁寧^{ていねい}に手入れします。⑥仕事は翌日^{よふじつ}も、その翌日も続いていくからです。長年使い込んだ道具は古さを感じさせず、使いやすく手になじみ、つやつやした木目や刃^はが美しさを放^{はな}っています。

20歳若くなった気持ちで生きるというのは、「明日もあさっても人生が続く」と考えることです。まだ先があるとすれば、体調不良を「しかたない」で片付けるわけにはいきません。食生活や生活習慣に気を配り、必要に応じて治療^{ちりょう}を受けて、体をしっかり手入れすべきでしょう。5年後、10年後には大きな違いが生まれます。これこそが健康寿命を延ばすということなのです。

おわりに ⑦「百活」は一日にしてならず

体と生命に関する研究が飛躍的に進んだこんにちでも、人がなぜ年老いて死んでいくのかはほとんど解明できておらず、不老不死の薬も存在しません。現在生きているなかで、22世紀を目にする人はごくわずかでしょう。でも、だからこそ、今、命ある喜びをかみしめながら、一度きりの人生を大切に、丁寧に生きることの意味があります。

本文で見てきたように、100歳、110歳を超えても元気な人は共通の生活習慣を持っていますが、他にも似ている点があります。体調が実際によくなる習慣を見つけると、気軽に日々の暮らしに取り入れて、何年、何十年と続ける柔軟性^{じゅうなん}と真面目^{まじめ}さです。

「人間は習慣の生き物である」というように、人生を作り、人生を変えていくのは習慣の力です。健やか^{すく}に長生きしたいなら、健康長寿を実現した人の考えもまねてください。繰り返し行うことで、いつか自分の習慣になったとき、年齢を重ねるのが楽しくなるでしょう。

(奥田昌子「日本人の体質」研究でわかった長寿の習慣」より。

なお、本文には省略等があります)

*1 慢性……治るのに長期間を要する病気の性質。

*2 百寿者……100歳以上の人。

問一 ☐・☐に入る言葉として適切なものを、次のア～エの中から一

つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア なぜなら イ しかし ウ あるいは エ しかも

問二 — 線①「意外な結果が得られました」とありますが、この表現から、

筆者はどのように考えていたと予想できますか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高齢者を対象に実施しているので、興味深い結果は得られないと考え
ていた。

イ 家族と同居している人の方が、一人暮らしをしている人よりも、生活
満足度は低いと考えていた。

ウ 一人暮らしの人の方が、家族と同居している人よりも、生活満足度は
低いと考えていた。

エ 一人暮らしをしている人は、不安に思ったりきびしくなったりするこ
とはないと考えていた。

問三 — 線②「むしばみ」の使い方として正しいものを、次のア～エの中か

ら一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大気汚染が地域の人の健康をむしばみ、事態が悪化した。

イ 昨日から歯が痛いのは、むしばみのせいだ。

ウ やり残した宿題が気がかりをむしばみ、よくねむれなかった。

エ がまんの限界をこえた彼は、顔色をむしばみ激怒した。

問四 — 線③「それだけならまだしも限りません」とありますが、どう

いうことですか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で
答えなさい。

ア 健康への意識を正すのは困難だが、病気を発症させにくくする確率が
高いということ。

イ 孤独から抜け出せなくなるばかりでなく、子孫までもが同じ考え方
しかできなくなる可能性があるということ。

ウ すべてのことに意味を見出せなくなることは仕方ないが、病気に関す
る意識は高く持つべきだということ。

エ 後ろ向きな感情に支配されるだけでなく、病気を発症させてしま
う可能性があるということ。

問五 — 線④「気がね」の意味に最も近いものを、次のア～エの中から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア 無礼 ぶれい イ 遠慮 えんりょ ウ 限界 エ 気配 けはい

問六 — 線⑤「時計の針を巻き戻す実験」について、あとの各問に答えな

さい。

(1) この実験の説明として適切なものを、次のア～オの中から二つ選び、そ

れぞれ記号で答えなさい。

ア 実験は、1959年のアメリカで行われた。

イ 参加者は、「体験」と「過去の思い出にひたる」の、2つのグループに分けられた。

ウ 一週間の滞在終了後から、参加者の行動に少しずつ変化があらわれるようになった。

エ いずれのグループの参加者も、半数以上が知能テストの成績で向上が見られた。

オ 体験グループは、聴力、記憶力、握力が強くなり、健康的な体重増加が見られただけでなく、視力までもよくなっていた。

(2) この実験を通して博士が導いた結論を、本文中から二十八字で探し、はじめと終わりの五字を抜き出さなさい。

(3) この実験における問題点を三つ、「〜こと。」に続くように、それぞれ二十十字程度で答えなさい。

問七 ――線⑥「仕事は翌日も、その翌日も続いていく」とありますが、これはどのようなことを意味していますか。「〜ということ。」につづくように、十五字程度で答えなさい。

問八 ――線⑦『百活』は一日にしてならず」について、次の会話を読み、あとの各問に答えなさい。

純子 この言葉は、「ローマは一日にしてならず」ということわざを踏まえての言葉ですよ。

先生 よく知っていますね。西洋古代最大の帝国であるローマ帝国は、長期にわたる努力の果てに建設されました。そこから、「ローマは一日にしてならず」ということわざができ、「大事業は、長い年月にわたる努力の積み重ねが必要である」という意味で使われるようになったとされています。

純子 本文は長寿についての話ですから、「百活」は、「百歳までの生活・活動」、つまり「長生き」ととらえることができますね。そう考えると、

『百活』は一日にしてならず」は、「1」という意味でしょうか。

先生 そうですね。本文でも、一度きりの人生を丁寧生きるための力のベースとして、純子さんが指摘してくれた言葉が繰り返し使われています。

純子 「ローマは一日にしてならず」と似た意味のことわざとしては、2がありますね。私も毎日行うことを決めて気軽に取り入れ、丁寧に、自分の人生を歩んでいきたいと思っています。

(1) 1に入る言葉を、二十五字程度で考えて答えなさい。

(2) 2に入る言葉として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、

記号で答えなさい。

- ア 一寸の虫にも五分の魂いっすん こぶい たまし
イ 百聞は一見にしかず
ウ 千里の道も一歩から
エ 三人寄れば文殊の知恵もんじゆ ちえ